



新著聞集

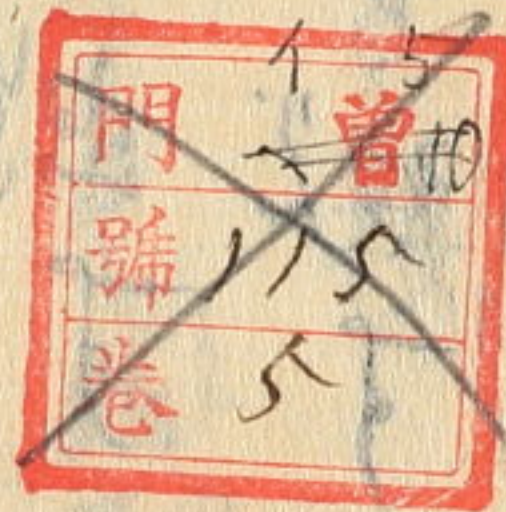
五

13  
115  
5



新著聞集

奇怪篇第十



病床了猫束

祖母孫と噉

伽藍滅没す

妖猫友と誘

四子と同産す

異形の赤子

山伏夢に入子成す

炬切名劔

化生夢に入る

妖の體なき妖者

猫妖し女とる

出鬼勘定

薄了稲の穂を生す

壯士童を引て谷に入る

婆子妖呼上まり  
火車はまろて又て腰脚爛き壞る  
人活をわしと狐とふれ  
三子と同産す  
多燈は別院了天狗僕とふる  
真名古村蛇孫髪粘る  
葬処了雲中乃鬼の女とふれ  
夜陰茶亭了兩首出波  
灰骸雲了今兩足と垂出す  
茶店の水碓了着の鏡と現す

熊野巖洞了大猫久しく棲  
蛇寝了人へのゆびり懐胎し始て知る  
美形乃二子と同産す  
二蛇頸とゆい人家倒了寝す  
古狼婦とわして子孫毛と被る  
面見二火車一  
出美袖とひく  
土家内二墮  
僧尸肉と噉ふ  
和泉小山取と更

病床了 猫まら

江戸中橋牧野乃中野み兼くよ都の仕の二平  
金葉の下女に病に何あそむる老より猫ま  
ま枕了 儂君あんと人といふせくおどもあつに  
誰れす 病人あすといひしくり方とるん矢作

祖母孫と噉ふ

上州厩橋より二里ぐらゝ隔て一 大胡村の名  
前大塚七之助といふ都乃母七十余歳なるが三  
歳了らる孫と抱て昼夜寝せし一 所を

淡島山神の  
江崎の  
海軍艦  
...

の孫や噉ううとをわう強ううとそをせりぬ  
七之助興とさぬく頓てううて率く入一と  
り

伽藍滅没す

薩州白鳥山乃繁了真言宗の大寺なりし  
天和三年七月上旬了佛殿のた一夜影しく  
震動ちて不審しく思ひてんまればす  
了七のれ大伽藍の山へううせし跡も  
うく林木一本もものうううし堂中へは精い

者六人乃灰戸泥了取うれて所し太守の書  
納めまうは法花經八物のも土中す所し  
地の端り土竜のりちる路うて所し  
地乃産了りゆりまめりう

妖猫友とつとら

淀乃城下乃法善院の修天和三年れ其  
疥りりわ晩方了便しゆまきるに撮め切  
をまきまきふくし叫ぶまきまきし七八  
飼まき猫火燧の上り所し頓ては

出て程をくわくあつた大猫 巴まゝ  
して内に入き程を火煙の上へ登りしに  
糸の指いづく今取納屋町へ踊りしは  
んと互あはれまればけしう程の意もよく  
加と下角の地ふり成りしとてをさうしに  
の我で信せそまも程のいさくまひるて  
叶しとせたらうし一本のこくに程をさうし  
程の件の所くまうしとさうやひるまゝてまゝ  
指とちで我ハせぬとしもさうしつは程をさうし

まる取へるくちも我も切さするかと云れ  
カバ指くしるも程も程又も取らぬしと也

四子と同産す

備後 赤名郡 神田町 油ヤ之妻とす者之妻  
四子と産つて三子ハ男 一子ハ女あり四人あり  
産ましハ髪を長く巻くことく  
額に角三本ありしはなをろくして捨りし  
す少しも髪も山なりしはくはまをさうし  
るハ和漢よりたがひつるものとす

吳形の書

延宝六年一ノ泉州さういの夷嶋より西三ノ  
はりちちある書などをすて至りしと大坂  
堀の是君よりとて花人よりとる色物し  
りか美形の者より一もたすりしとや

山伏書より入り子成す

信州より入る一山四八歳を成すとよ人成す  
る一子も痛くワのくひ成す人きりて  
上りより親を養ふりくめ成す一山伏成す

頼山子と引立てりてやとて互に引あて

山伏より引こくまくと思ひて養を成すに聖は

りて其子成りてはるすもくし及び今福

のより子も限り頼に御の山よりし

りて連中んとするとあり今度ハ

身乃陽りかてとて安んじに終る山より

負てゆりて養を成す決のりよりそのま

平復しりりそのまハ養も及ぶ頼より

よりしりり







しく居るらんくゞゞゞの戸半ゆてりしし  
面三尺をひきの六法師ののをもきしや何れぞと  
て燈籠とぬき飛ぶかまてり一筆のこくれば  
六とよのへて肩とりしと細くかどるるをば  
たぐこや多截るる何れは神なく綿くち  
流くまぐく一妖者もくちくく声と位し  
かの者もあらん流るるせーまらん  
猫もあて女とくる  
何れは神なく綿くち  
流くまぐく一妖者もくちくく声と位し  
かの者もあらん流るるせーまらん

し小倉平法恩寺の内教藏坊肝賣にて  
局をかへと跡りやと排りて歌乃及ともお  
心ゆめく断りかきまのらひと寝てはく  
主人息女の部屋とねをうけに息女八寝て  
榻後とつもて居るるが口ハ耳の根まきまわて  
耳ととりしてあういぐせんとおのりし  
若仕とやしてハ悪くうらんと思ひぬるとまわて  
局をひきかちの子細あまバ暇そくすらん  
と何れし何れ思ひくすあのみく今儼る

かく宣のたまをよみ顔かほ色いろおを落おしかり声こゑれを頼たのて援たす  
うちう切ききく大おほなる古ふる猫ねこうてけりしとれ  
跡あとそののまきく作い坊ぼうお終おひりの外ほか果はげとも多く今いまう  
けりしとらん

幽ゆい鬼おに勘かん定ぢやう

越こゑ前ぜん宰相さいしやう殿どのの侍さむらい友とも野の本ほん跡あと以もた身み内うちりし後ご代だい先せん  
身みがまへくゆとく奪うばひ勘かん定ぢやう立たびいふといふて  
今いま浪なみ花はな屋やを跡あとちあらくうと妻さい子こハ追おひ  
しおとつひの下した女め一ひと物もの託たくて我われハ泣なけちありり代だい

の如ごと原はら私し歎なげ了し恩おんとけをまけ家いえと死し例れいく我われ  
とあるまらんせくそいふ念ねんちりあつしとヤやうん  
勘かん定ぢやうすくまを目め守まもり人ひと誰たれ汲ひて呼よびておのく  
招まねきけりあててこの帳ちやうのわの用もちけりお地ぢなご  
物ものと勘かん定ぢやうくそあるすく我われも妻さいハげり  
我われハそすをちりしけ飯いるをそく枕まくらけりや二ふた日ひ言い  
て物もの託たくすめりちりしをちりしお急いそぎに涙なみだまき  
泣なけちありなごすじも愛あいこもりしけり  
宰相さいしやう殿どのきくしめく奇きおのりちりしとて跡あと

まてのちくくおぼりまわしとや

薄稲の穂を生す

天和三年の秋伏見の幕府破つたときといふ者い  
庭の落く稲の穂生しあり人と及て奇事  
乃りとさせし

壯士童で引て登り入る

江戸町所一町目の横吹や町つて十三条く  
るち何者の子供ハお母ちりら常盤橋にて中  
小姓と及くし者二人は袴と袴山所のせんを

ゆふれよにもあつたはとて金まあるとせしうはあま  
物もておびり今おくゆふとて又妻かふれし  
やしくおておまわらんといふ今おびりおまを  
又妻かふれ本庄の家むらまゝ又おて頼て割刀  
と出しおあるとまゝと肩代とまゝとらぢとと位呼  
ハ頭とくまを引立ておびりにかなく連らぬて  
なく三日経ておまの臭うり臭うらあいらて  
影しき家君ありめち千人の男の位者あり  
唯朝夕一血の付る葛籠袋一色と多



眼くありとて悦河へるり限るる一寛文十年此  
るりてはと

婆小妖呼し来る忽成す

江戸八所塚二町目移らびの甚無湯とり者所附  
喜しく流る君ありとて六千汗の焼置も成し  
中身の口くきくすといふ甚無湯むいふあり  
これく物の中招くと下人先てて六何者も相人  
とてして立追放つて去り甚無湯に  
何し絶成りあると業計などかりく用

事あり更り發りして其言方に身海り見し  
其焼ハ何地いなる者とありとて此史室又の  
るりてはと

火車の来るを又て腰脚爛壞

武州騎西の所り里迄寺妙願寺村にほや安  
や者所へり所付不足大及く飛出やま火車が  
来るはと高声なり呼て倒れ一室内周障て  
出るはと正解り物とほいのでそれなり煩つき  
腰より下腐れをま十日計して成る

二三軒さうりの者ハ巻の燃上るとして安んずるもの  
出づり有りあるやとてまじしと云くこのよとて  
身の毛と立て舌とゆるひありと云り

人活かしく物となる

發州ニ見ゆれ近き取らう境ありふ浦ありは  
乃者塩海菜と商買してなる都ありけり  
何れ何系れ稲荷のおろして志づく候も若れハ  
老る物一匹出大鳥若と何れと云く飛  
ありけ者けりしと云ひ見ゆき若れハの物

女も三よやけりし中しく我ハけりけりといふ  
左のハ我教んとて著る物織とぬぐを繩と長  
つきて鳥若の上へおろすはくは川もは  
その者も飛越るものにして世也と云く本國  
ありては鳥若もくは我若の身と敲りハ妻  
子とてきりく立てぬもおろし古物あり  
肉へくすすくくイヤ我ハ亭主なり親なりといハ  
中へつめき噪ぎて入るものも自らも件のみと  
たひ出しけりくと云我ハ活かしく畜生なり

墮ちるものやしてそれより是非なくとら去(あ)るべ  
何君となく藻(あ)の鱗(う)ちととの食(た)くらじあり  
其後人(あ)り託(た)して我子(わがこ)やくゆさん大(お)定(さ)りたる栖(す)君  
なまゆへ迷惑(めいわく)せし向(む)くお慈(あはれ)之(の)すぬいと定められ  
きぬつと口(くち)むしりまされと取(と)の者(もの)ももこの比(ひ)名(な)際(さい)  
の者(もの)のちれむ一(い)つれも不便(ふびん)なり好(よ)ひ小(こ)き  
祠(ひら)とまて垣(かき)間の稲(いな)荷(か)と祝(いわ)ひあるとあり

三子と風産下

西(にし)の久保(くぼ)天(てん)酒(しゆ)寺(じ)門(かど)前(まへ)之日(ひ)傭(よう)と業(ごう)とすんれ

昔(むかし)素(す)といふ者(もの)の妻(つま)三(さん)子(こ)と産(う)まはるゝて元(もと)禄(ろく)十(じゆ)六(む)のち  
廿(に)七(しち)日(にち)同時(どうじ)に三(さん)子(こ)と産(う)まはるゝて生(な)れたちあり  
健(た)るもの男(おとこ)子(こ)はてはりりる中(なか)の子(こ)ハ双(ふた)の耳(みみ)とさるる  
了(り)マがひひりあはるゝ名(な)とハ三人(さんにん)はらぬて三(さん)羊(や)惣(そう)と  
けり三(さん)子(こ)と産(う)まはるゝのひひりあはるゝ天下(てんか)の吉(きち)ゆはて  
けりしりて行(い)合(あ)儀(ぎ)より役(やく)人(にん)たりゆきり色(いろ)いじく  
川(か)穿(せん)議(ぎ)りるま鳥(とり)目(め)穿(せん)費(ひ)とありしと地(ち)内(うち)を人(ひと)ハ  
細(こ)く製(せい)成(せい)あり

高野(たかの)の別院(べつえん)より天狗(てんぐ)僕(ぼく)となる



高野山金剛三昧院の下人ニモ多公と云ふあり或  
時住持の僧他出たりしに雨風をけりし下人  
ひひり来るとして柳灯をとりあくる其具もこれ  
をひりせんとしてけりしと若くはひひりせんを  
一向に笑ひて行きてよき橋に渡りて歩むに  
風ぬすじしも障りけりし其の僧下人よりひひり  
方ハ直人よりハ何れも隠されんと云ふ今ハ何れ  
けりそちん我ハ門前の松と楓とに候へ天狗あり  
行跡の行跡貴く候りしや仕候りし今ハ何れ

火難りしと云て飛りぬ

真名古村蛇孫髪粘る

紀伊國日高郡真名古村ハ真名古の在り候へ  
取らりし其の村ハ蛇の子孫ありとて隣ハ隣村に婚  
姻と結ぶんを其所のありハ縁の及来るものなし  
其中ニ往古より蛇身の女一人て居りしに生るるの  
今不詳りてはゆりなしく其容貌千人よりすれ  
髪ハその長入り候りて地と雲の間に墜粟花り  
スハ伴の女の髪は入り候りてそのものちちと云ふ

流るゝもつま合て櫛の齒もさし陸粟花のまき  
つらりの川へて洗へし忽ちさやうと成てさうく  
と解るちりけ女八田村にも連値男なきと地

葬取へし雲中の鬼のよと斬とる

松平五左衛門殿は身の葬礼へし雷電四方に閃き  
龕の上へし黒雲がらじとみちるを龕へて掛  
うひひえくあふりし怒のよれく成よの雲の中  
より拾ひし物と扱うちいへるハよ言して  
雲くまぬ跡をえんを血ねびしく流さる

其中に怖ろしき血三ツ付の赤く銀柱形とする  
うへへうねの毛生る物切たしうせぬうこの  
刀と火車切と名つち下おりしと証書を書き  
りして其引出物へしちりけしと証書は杖を強  
あつて懸心やうてけりしとあるとせ

夜陰茶亭兩首出設す

能登日向をまきまき初め首途へ松平親父おき  
まぬりしとあふては燭と立て用ひにりありに  
引とえしとあふハ葉やのましが内へ火燃し

るもきくゆらまのともをうれを売の翁とゆき  
首と出つすのて不審すおひ子息はあを  
呼れをえのとけし涙す是居座のまを  
別三人あふふす子息はあをくわく齊く  
肉とすしし火も徳件の首も是次内にて隈く  
りて殺れがさるれあやしき物も是に立向く  
の通くは知てさうとすも是く又おのき  
狸の舌考りつるはがさうし時ゆきもすもはは  
かりいなるゆふらゆりんとさうさぬり

成骸雲す入り兩足とれ出す

寛文七年閏二月六日俄く雷はがき  
ふくは牛色の者死てま田の格霍れ焼場に送る  
しに馬雲一しらすひ下り籠乃上りやゆと思へ  
成骸を土中に提あさるあのは足雲は甲古ぞく  
とけがしして法人えけ

茶店の水碗着の面と現す

天和四年二月はるす中川佐渡守あはれふたり  
休す堀田小左衛門と人はいりおの白山の茶店に



紀州 高洞大猫久しく捕

紀州熊野の山陰の洞より虎のくくりる獸候し  
里乃大猫狸をて捕りて數にやうび又人をも  
追ふれを里人汝地了て抄ハ見候高窟小僧  
まぬ或者竹の串と輪とを振つてらるりちとあつて  
穴のあつて軒とさしつれつてつらま倒きて駢  
しつて拾起る竹竿れももちあつてくくりる  
うは大方の聲して鳴つてめま所もひびきしう人  
あまの出入歩報しちり猪やとりし大猫をて

ゆりし身享三よ高洞のゆり

蛇變トて人よ支り懐胎して初て知

豫州宇和郡高洞村の庄や高方未進のゆにけり  
一里半隔り城下つて来りて心もさび逗留せしに  
岩へ入あつてに夫ゆりて女房と同一床に卧ぬ  
女も一めハ高の男あつとむひりに後懐胎して  
産み候しに儀つて蛇来りて守り君を  
人おららまの遊ちるせハ病人それ報すな由り  
むしりやや産とりに繩の糸つて候きて



いさしきく一とて可くもくし内よしきぬ  
亭主使と出さしゆく  
重なるかかか  
けりしきも  
入て又々に色青  
身にほしき  
ハ女中の若  
又せぬ  
ア面を  
首飾  
巻  
衣  
細  
蛇

頭とさへして  
みま  
や  
蛇  
一  
今  
り  
そ







安君一はまづき倒れて死す

坐冥袖と泣

江戸柳原のほや布衣とよ者此妻天和三子の妻  
身海くしす主比のち夕暮小坐冥袖と泣  
下女が袖をひきしうたつるやと伏倒す  
叫ひし驚き人あてふれハ絶死す  
了水とせしぎ叫ぶるに幸して蘇生し  
此の岸油刈切てらるしうは不審くて翌の  
朝正妻乃塚す諸を及れハかの袖石塔乃上に

かゝるてりしとらり

僧尸肉を噉ふ

増上寺塔中より徒水院へつる時此者とはまきり  
沐浴剃髪はてもまのしし同宿の僧髪を剃り  
石や海りて一寸くらまきり離して甚く毒  
しはみ語るすとがめらねんも口惜とおのひ  
筋の口の内へ入し隠さんとしあつた其の味は  
みずして細くくひらうそれたかの凡味は  
毛髪まきりてお入るに堪りも裏なる墓







隣の者も走りよるに木の葉蒲団をこきよ  
おきせおそ人おびやうり急いやく急い  
推殺しをせりしゆも先おの物をも取れり  
しよせりしゆれをせりしゆも長持不  
寺におりしと也これよりまもる心よ  
煩ひしゆ百日をぬりぬ後り身ぬり  
僧の速成を食り急いやく急いやく  
いふ乃雜司公の急い子と人りし  
了て真言宗の學通りけ寺にお入て修

と殺害し其跡に多の金銀財宝ありして代家の計  
ひしゆに俗縁の先あり分散ししゆ  
朝弟が馬屋の内悉く火にありしと娘入て  
親了告驚き入れぬみ軒に炎しゆ  
失してり其次の弟が家入り八重束火の玉  
火の玉と隠しり跡が急いやく急いやく  
火の玉と隠しり跡が急いやく急いやく  
火の玉と隠しり跡が急いやく急いやく

みゆゑにちしゝ免ヤせん角ヤせんをてりし  
野々神社佛院了願を立てかの傍の跡を  
念ふるす吊くうは終る恙なくゆりし寛文  
元徳のあり波傍財宝了甚く執念せり  
まゝ一念以てなりかく災玉しるすて  
人ごちしゝてり

悟支財で貪り帯をち海ち蛇となる  
江戸小伝馬町本誓寺住持妹舞めをある寺に  
門あつて春米屋とあり寺におり内を

辨て居てちとせりし餘りなれり  
寺より少油くぬち贈まは頓て賣て代り  
ふすや人とちりて争で角ハもら地と向ハり  
まゝハいぬ也出令りち終れし恙へしはて  
はるひの者了ハ朝夕も春米れあんがいとせり  
於茶ありしと食セヤき治のあハ自分にも食せ  
かく辛く何すまじもと定め令せりし是是非  
ちく孝のつるはと免しかくむり悟くせり  
富限了り銀二十也月箱と寺の土蔵あり

と其志のいふは、まて長老も笑止るなりし  
時、教化せしむれども佛に及ばぬの心  
痛むやうもあらむ。口申しむるに苦  
し、さやうがうも、うは養生の爲とて妻子を  
引はき寺にめて看者せしに、朝より夕まで  
まて、障子と唯土藏のやうて、及て口を  
この内乃金とす、て、或すへき、が、泪とら、が、  
け、ま、或、う、り、も、供佛、施、僧、も、ま、う、べ、や、び、品、牌、お、  
り、金、箱、と、至、べ、い、て、云、い、の、既、り、條、終、に、全、所、

て枕元、り、て、記、至、く、帯、ま、を、海、ち、に、蛇、と、成、て、鮪、  
歩、り、と、長老、法、師、了、包、を、念、佛、と、書、て、川、へ、流、さ、  
ま、て、せ、れ、う、條、終、と、す、い、ま、も、耳、に、も、ま、い、の、  
ま、り、て、只、念、め、り、れ、と、云、て、ほ、め、り、墓、ら、く、り、し、  
体、法、を、ん、と、し、釋、了、り、て、又、ま、バ、下、帶、他、了、  
ま、り、て、腰、と、は、し、り、と、漸、く、に、放、て、華、一、さ、り、  
つ、作、悪、人、ハ、自、他、懺、悔、の、み、り、と、し、任、務、後、義、の、  
け、り、流、る、ま、り、と、親、り、と、す、け、り、

止、竟、確、と、なる



洛陽寺町通松原下町に飾屋九基とあり者乃  
引つひし玉とよ女あり生國ハ若狭の者あり  
四五ケもまゝ公けしきくはるにちりく衣類もとれ  
ありたれは主人もせにそおひつる時尋しにれが  
細のれは後父ありしころく成ありおれあり  
卯跡吊ふべき人もなれんむ時過り常集寺に  
位牌と立忌日よに供養とらししき志願と  
て何ものもせし海とせだらししひりふるも下  
目への浪と別懸せしとやあらんむ主人も下懸

お方として奇特なる志らして隠居しぬの寺に  
二番此位牌とて資堂料とて浪草目たぬぬ  
御し浪と主人の妻しつるあまかくて玉  
可し冬の前よりを懸あるお病もたりのまれむ  
の四し伯母ありし者のまへに引こし醫療せかへ  
しかども叶て元禄十亥年正月十日に身死し  
主人のりや人もけし通しあれを不便のまに  
おのりし金に二枚へ入りしりまのりもらして  
御しし御もろも懸をつきし病をえあり

よるまもいとまの六ちり蠅一ツ飛来り九と糸夫婦が  
何なりとのと飛ぬるりもれむうのゆく多く痛きぬ  
やうに捕へて他へくちち方の中二日殺すきて  
飯りもれむかき移しての裏なる言能川の所なく  
放しもるに又飯をぬれさの室内の者もこれの  
玉り止鬼ちうんと口ずくもれむ主人も何中  
よにちりひびきやうにせんそてお先で少く切て  
取と捕て放し方にけ蠅又飯りきり何あり  
不思議さうけいひのやうちと紅し一筆て移ら

帝に仰きくはしそ又飯ももれむ今夫婦の  
者も興はれてさやぐ思ひとかりり日外何あり  
し銀のものとおひびきし是し執着せしもれ  
亦の追追らむうもんがふる兔に角不便し何ひ  
いへせんそ思もるに伯母の後世の及了の跡き  
者のぬりし顔しうだれの者のふるまはぬ  
の根との貴き寺人も上も回向せしひんそ  
目以飯依しまそゆのまの深草の通西軒自空  
上人とみは止者乃宗内なるまの同く山の瑞光寺

慈明上人といひぬ寺へ移りぬまるともわたり細と具  
了り上りて二月十日の夜に弟勤を病つて  
少く幸四日の午に死すなりとありぬをきり今  
悔いなき中流にありて今もて死ぬなり  
あり蠅何とて左目ありて自滅しあり  
これ一月なりねどなきはく奇異の事いひ  
これとも箱入りて通西軒へ移りぬ  
法皇ハ律師も有りて思ひ蠅ふ加持  
土砂とありてありぬ蠅鬼牛とせん  
孫

修一右乃信施ハ永くの資堂にをのしきあり  
瑞光寺の上人への法を授けられぬ乃親切られぬ  
よの蠅とほりて供養せりありて  
浄人惠雲法師有りてありて妙典ハ油  
讀誦しきぬ則山上へ法乃とてに葬せぬ  
率都樂ちとて立き世に又回向のありて  
きりありて塚の邊にありて細き空あり  
上人も不思議ありてありて塚ありてに  
きり蠅とありてありてありて大徳の道あり

速疾生天セーそくしやくせいてん—それとまがくくを修りしゆり—其後  
丸薬源まるやくげんへ来りき方かた日ひ以もつ業ごう蠅しやう来りき比ひ也やもくも  
希まれるのりして所ところしと流ながるるなり

妬女妻ねんなつまと慍うらやま—念佛ねんぶつももすも治なす

寛文のころ阿州英馬あしうへいば取と貞光さだみつと取とのちや  
某氏あつぎの家いへ来りき吉兼きちかねとよ者ものと傳つたへ栗栗とよ女むすめと  
夫婦夫婦れ修しゆ成じやうセーに又また其隣そのとなりの娘むすめと人の媒まへつりて  
吉兼妻きちかねつまつり心こころく栗栗のりりに憤いらいりおのき  
乃母そのははの娘むすめ村むらの薬師やくしと新あたら王わう佛ぶつの眼がん耳みみ胸むね三さん取とりて

打うちあがり慍うらやまろろ七しち兼かねハ恙やまなくして素すにいの栗栗。  
生いまま分ぶんててささぬぬ慍うらやま—もろもろ流ながるる山やまぶぶ—あまあま。  
集あつりて祈いのり加か拍ぱくとと其その先まへ法ほうにに験けん—ちちろろにに三さん。  
少すこ経けいて既すでににぬぬべき流ながるる—比ひ肥ひ村むらの東あづま林りん寺じ。  
周しう警けいつりけのりのりと流ながるるししくくななまま—也やいいとと安やすみみととし  
病人びやうじんの枕まくらつり候うけいててワワの聲こゑににけけしし念ねん仏ぶつととしし十じゆ念ねん  
授おづちちももぬぬ—ばばををつりつり脊せきかかくくりりししととてて念ねんせ  
よよろろののりり—ああららハハ三さん日にちののるる精しやう進しん—てて既すでにに念ねん仏ぶつ  
せせののりり血ち脈みやく授おづちちももぬぬ—とと流ながるる杖つゑ氣きととし

後娘のわが家と執る

浴湯一糸了備後といふ系人女子に左近といふ  
者あり継母の腹より娘三人ありしが母を詔へ  
らる左近といふ所よりこれに歸入二人の娘ありて  
嫉妬しに母煩て死すれ三日あり左近の継母  
のまよりいぬへるいきて絶めて終つて身腐つて  
又三日あり左近の妻よりいぬやまをわたりや  
姑の縄を以て我首と志せんとするいふらん  
情なや堪やうやと叫びて其伯父なる五條の

宗仙寺の東堂血脈を調へ姑の塚よりおさめて吊  
りしりばまらまらに痛腦えろくちりし

新著聞集

冤鬼篇 第十二

幽影屢<sup>ゆい</sup>所<sup>しよ</sup>り<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup> 數人<sup>すうじん</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>、見<sup>み</sup>る

炊芥<sup>くわい</sup>茅<sup>ぼう</sup>と<sup>と</sup>生<sup>なま</sup>い<sup>い</sup> 菊<sup>きく</sup>寺<sup>じ</sup>懸<sup>けん</sup>燈<sup>とう</sup>

息女<sup>いきむすめ</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup> 幽<sup>ゆい</sup>像<sup>ざう</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>し<sup>し</sup>忽<sup>たち</sup>ち<sup>ち</sup>灰<sup>はい</sup>す

怨念<sup>おんねん</sup>と<sup>と</sup>戦<sup>たたか</sup>ひ<sup>ひ</sup>卒<sup>すつ</sup>て<sup>て</sup>脊<sup>せき</sup>の上<sup>のうへ</sup>に<sup>に</sup>被<sup>お</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>

夫<sup>おつと</sup>妬<sup>ねた</sup>妻<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>怨<sup>おん</sup>影<sup>かげ</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>し<sup>し</sup>ほ<sup>ほ</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>灰<sup>はい</sup>す

灰<sup>はい</sup>尸<sup>しかばね</sup>人<sup>ひと</sup>に<sup>に</sup>つ<sup>つ</sup>つ<sup>つ</sup>わ<sup>わ</sup>を<sup>を</sup>念<sup>ねん</sup>と<sup>と</sup>告<sup>つ</sup>ぐ

勇士<sup>ゆうし</sup>の<sup>の</sup>凶<sup>あやむ</sup>鬼<sup>おに</sup>倭<sup>やまと</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>恨<sup>うら</sup>む

と妻妾を現下

信高喉で比

先夫招呼はわに成す

先妻魂とらうす

恨る婦一錠くるる潜妻家と去る

結子母了還ひ恨靈子と惚す

妻の魂追来り因了故

條義附集

使遺書第十二

幽影屢たりりれ数人悉く見る

久保吉左衛門殿右江の児小姓はまてもらき科了

寂害ちりりりなはまが母けりともまのそのめ

かたごまごのゆに及みへまかりと思に口説山の恨

あぐそ思ひあつとんと嘆り詔る割をすき海

かりーま後のめ少姓が幽霊たりりまのまらん人

目了るすーは男女も了り恐まあへまがるに

嫡子求馬殿了りりりるに件の幽霊毎夜出

て夜伽の多く居る中より通るーと捕へんとす

まば雲烟のこくほしてほくせぬ人々肝を冷し  
佛神を一向了新里に養つて居るは御く使  
りしうと出尋の出るものハ程ヤまけりしとあり  
然るに三よるそ公儀の沖制れり自今の子管  
とくへ一科了ゆると其身ハ越後乃長忌敷聖  
後河をめぐりて既多子息求馬飯ハ奥州 棚倉  
内蔵化居をめぐりて河既くして終り家はらじハ  
件のりれりやと驚く

炒芥菜と生ハ菊菜懸燈

小畑孫市殿奥がさるる石の菊とり女ハ膝部乃  
汲りしるり何物絶おりに膝とそれハ何とし  
と力りや飯粒の中り針のまじり奥がさるる以  
大寺り怒りきありて日まきのに類おけりし  
自ら也報ハ巴の海に何れんをやる程を海しき  
巧ヤ一増ゆよとて髪をほく引立て意の井  
筒り蒸ハ入きて報るありやれがぬも家ハ  
何れしうとて世の情けりきよとて炒芥子と井  
の端りりいよと菊よ着いあてしありにや左も









大坂陣了名せりしせし一勇士了りて成天魔  
せし橋んとけりし一勢うれを幽尋まるといし  
く又轉る一目的めき笑ひてアツトよて俯伏  
了成りし一河内甘尾村半女まうり君ありに件のゆ  
見、一はま女の云く士の妻まうり人のくし  
らき安やとせしあよりひき世に移ると詞を掛  
られし一は振るるるしと笑ひて一は也あは  
件のよりハヤミ一かど侍様やとけりし果ゆ  
まうり一是あのみハ軍法の達人と一人の威あり

灰尸人了附て念と告

松平土佐守殿は戸の上屋敷の所長ヤ了り候へ  
やうす存或ハ灰する人もあしまゆへあくい  
おひりしりも部屋にゆりし一は詮方うて差山  
喜三郎とよ人候し一は家来了りゆつてまゐり  
口より一は我ハ國は十たあを妻うりまのりの科  
て刑罰了り値し一はらまはがな一は自ハ女の  
何の子細せしあうざりし者と同罪了りたにら  
まひし候了り頸を斬了りけりぬも、磐石を上り

とらまゝ一割一さの計りなりけり此の部屋より福入  
り根のハなれども我若患の氣よりいひて  
かく燈をききよとてや一哀を願ハ成骸と居り  
出し一端を吊したまひれとてさあくとて遠きり  
其の十のあひらるる者ごとく家中れ上下ともあり  
まゝり一了門番の隠居半の向りの老人是  
とて其の都ハ元和の中にも拵の役了して私欲  
のりりして夫婦より一首と削らまゝ成骸ハそれ  
部屋の下りしりまゝにまゝに地上久き

し目付下知して天和二年六月廿五日に部屋乃  
根太で放らほりてあれを棄てどく大石なりしと  
引の事してこれに躰躰二つあり一ツハ女の改裝長く  
生てまゝにハりけり幸竹として生るぬきなりけり  
かの物附ハ一町ぐかり隔てて一にやるとあはし  
只今我尸をさるるよよく吊てまゝりれりといひ  
誰の回向とていひて問ハ増上寺の祐天和尚  
の引取りせまゝなりといひて問  
せりるす一去知識たりて二人の尸をたぐらるる





八月中旬新ある大坂へ引越んとて用ゑし一先  
立て同職の者伏見の所へ合つた所へし  
この妻も同職しありやの者も必せし人の所し  
最下ぎと思ひながらふらぬ物程一頓て大坂  
了はんと是しき付件の丁へ何れへは遷居し  
余の同職の者も尤うよとて肝と肝し  
其者おひりいはりやとて新あるよとせ  
とて家へ引こりありし其所より一  
遠へは新あるの所へ發せしとて程々  
とらん

活霊咽と占

江戸靈巖嶋嶽の棚を家のお出右衛門  
と云ふ者よ久しくありて同一家の店や  
大坂へ猶子と叫下りあり其者ハ利根  
ありて高きもくせしありて煩し  
も不審なるなりし者ありしを何れも  
思ふものなりや維新全浪や  
何れもなれぬもなれぬも  
我らもいふ所ありし家との書  
を



誰れぞ寐入んとモれど咽とモ先さるゝみさ  
ひも也し終りしあれど亡業ねとるき幸に巧ぬ  
女の徳慕いそはりも巧しじり根子細るべし  
いそつこの由と衣集り告あしく大上肝と信  
書とらびくゆり巧いさ思ふ事の玉はや包  
流れと責しや及妻色とく今ハ何と隠さん  
かの者ハ高ゆくしとゆごと利後思入るる  
家了りりなバ初まハ不調法よのれを修め  
仕負家としろくせんと思ふが口惜さる程し  
と

とれし一念なくし終りしとモれど先さるゝみさ  
僻りりるるくんと巧ししやと亡業了りハ店と  
せんともぶりしは何も巧しハ心と翻すべし  
そのおむき商家了りして店ととるる  
病者ハ扶りり  
先吏招呼はぬり刻す  
江戸堤町了りし鼓歩み集るとよ者の書  
判ハ風屋の女ありしこの由とてひく  
お多氣おとら類し内もい着るのり

後つとゆほぐきうと睦しくすへしなやと兼も  
あまの志しやと懐いて絶る身ほく度し程で  
もつさゆあれむ人々のとやうしと道れやうして神  
瀧町の屋敷と兼とり者のかと嫁しきりやと兼  
三回忌の河原まつりしと兼逢ふほど憎くき方あ  
不ふともよと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
吉と兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
問ハはるまはと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
ぬしれと兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし

しと兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
しと兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
しと兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし

先妻魂といふは

常州の所々の嫁と兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
武夫と兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
と兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
國と兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
愛と兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし  
後と兼いしと兼いしと兼いしと兼いしと兼いし

憎しつゝつらとせめてハ今一といふ處で恨とらうらん  
とて女の身とて一と数ぐくの山川をえまうし  
保菴もろふ所もろふとぞいひさしくし辭と續へて  
まへにわくわくおひもやく眼の状をおとさくち  
あえへ飯しそり後の書し子三人を設けし  
まへに宜しき法了て感帯れを保菴も  
かの嫉妬の所おにやと心せりちりちりお  
あえの書おのりおのりてさし煩て身悔るはし  
告しうばおまり不便のりにて結縁せん  
西

へ越せめてハ在河のきりしに詰て一壺のまゆり  
て家中の一ぬまふたひて味下より二里むつし隔て  
いる寺まふでしその墓おうておんうらに吊り  
しに不思議や怪し固めをし石の率兜婆俄  
お倒き大地音もて示し破ると美し  
保菴教をかくしてアサくしやく結し地獄を  
女といひてまへにちかおを海へけし書入  
まへにまりてまき痛々をし助てくれより  
まへにわくわくを連ぬるまへに妻の怨を

と心の怨弄了らひいやとよ愛了て保菴を教  
しそハ初と一分立に先を殊へて了てのちに忠孝  
のや理と教してあぶりしは聖もいとあし  
まら海ら人のよあうぬる縁ははきぬるやとや又  
おの君とすつき日更と頼いほりてあうはのい人  
若うしあれむ怨念の者又あしにの君の人の  
ひい能くも保菴了ら回心し素の媒ちりて  
ゆもいあてはを信しと豊了ら了らんとあう  
おそれ合してあうい人へ縁ししにあうはなりと

也保菴ハ初りく頼い成り成りてありはの元福  
才のくありの比了てあうしとあう  
浪婦蛇となる潜毒家と去  
江戸是田町八町目紙屋右妻と頼りりよの  
はもり頼て終り身あうそしとあうのきくけいひの  
成覚寺了らたうつり端の庭をたて立済  
うは藩園の下り了る人ぶあうの思蛇成て了し  
おそ治しとあひなぐも怒よりあうて瀬戸の海  
報をあれむ蛇もあまら生あうて報しとあう

先づ家に入ると又も嘆き合ひしほど家の内には  
その形もさうなりし平丸白くるとひびしく其の  
おもしろく至りし女と呼びしに聖朝女遊之り  
と云く言ひしうど度りしりしハ定ておき  
きりももるものなりしなりし

継子母了さうい恨霊子と憎す

下野那須野の内下畦田村の助八といふ者父ハ歿  
て継母のりしにほく不孝なりし母のいづく  
は今のくのくくふせき目す逢すとも物こい

教ひつらも頌ておもしろせんといふの恐  
りしそはとも母りつかつて終り公事  
毎夜出来まうて憎せむのねを海へさ帳り  
りゆりふあありて後了ハ妻をすくつて  
湯釜山の行人すうらむ彼が菩提を吊い  
らむと出立もさうしとらむ  
妻の魂遊まうて國了候  
伊豫國宇和郡伊達宮内殿鞍すくらと  
はる妻ありて後三十日をり終り後書

いふくまはうりおまの虫君まう咽よりいふま  
あまのりす一明ま勇らり者なりし一が氣力るれを  
か國よりゆり序願ひ関船のまよりいふまにまていふま  
まうりに件の虫君眼あす一及てまておまてま  
下向くもふも初ハいふま用まておまらり今  
あままうりしとよ餘人の取まハ入らざりしおま  
何とま上より押すにむまししま者國にまに  
時く君のまうり終りしおま教しとまらるま

いふくまはうりおまの虫君まう咽よりいふま  
あまのりす一明ま勇らり者なりし一が氣力るれを  
か國よりゆり序願ひ関船のまよりいふまにまていふま  
まうりに件の虫君眼あす一及てまておまてま  
下向くもふも初ハいふま用まておまらり今  
あままうりしとよ餘人の取まハ入らざりしおま  
何とま上より押すにむまししま者國にまに  
時く君のまうり終りしおま教しとまらるま

